

# 日本人の起源、がんにも影響

## がん社会 を診る

中川 恵一

その数は100万人を超えますが、ATLを発症するのは5%程度です。潜伏期間は30〜50年のため、小児ではなく「成人」に見られます。

白血病のなかでも手ごわいタイプで、5年生存率は1割程度です。

HTLV-1の感染とATLは沖縄や九州に多く、北府さんも鹿児島出身でした。

都道府県別で白血病による死亡率が圧倒的に高いのが沖縄県です。HTLV-1の感

染率が高いことが理由です。

沖縄に次いで白血病の死亡率が多いのは鹿児島、宮崎、青森の各県です。このウイルスは沖縄、九州のほかアイヌ民族にも多く見られることが理由と思います。

一方、お隣の韓国や中国にはほとんど見られない点も特筆すべき事実です。

1万年以上前から日本列島に住んでいた縄文人と、約2〜3千年前に朝鮮半島から渡来した弥生人との混血が日本人のルーツといわれます。

47都道府県で縄文人由来と渡来人由来のゲノム比率を調査した研究があります。縄文人由来のゲノム成分比率が最も高かったのは沖縄県で、鹿児島、青森、岩手が続きます。

渡来人由来のゲノム成分が最も高かったのは滋賀県で、京都や奈良などが続きます。

稲作を武器に大和朝廷を樹立した渡来人が縄文人を列島の辺境に追いやったと考えてよいでしょう。

最近では、HTLV-1は縄文人に特徴的なウイルスで、渡来人に感染はなかったという説が有力です。ATLの地域差を説明する力ギになると思います。

がんに関連して、逆に渡来人が日本に持ち込んだ遺伝子変異もあります。

お酒（エタノール）の分解でできる発がん物質「アセトアルデヒド」を解毒する酵素がうまく働かない変異型は、縄文人には見られませんでした。今でも九州や東北にお酒が強い人が多いのはそのせいでしょう。渡来人が持ち込んだこの遺伝子変異のため、4割近い日本人が飲むと赤くなり、発がんリスクも高くなります。

日本人のルーツは、現代社会のがんにも影響を与えているのです。

（東京大学特任教授）

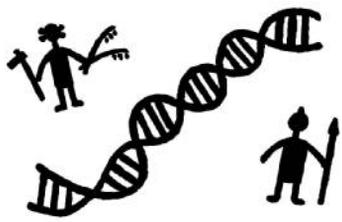


イラスト 中村 久美

広島カープ一筋で通算213勝を挙げ、名球会投手となった北別府学さんが先日、成人T細胞白血病（ATL）のため亡くなりました。65歳でした。

ATLは、日本で発見された「ヒトT細胞白血病ウイルス1型」（HTLV-1）というウイルスの感染が原因で発症する特殊な白血病です。主な感染ルートは母乳です。

ウイルスの遺伝情報がT細胞リンパ球のDNAに組み込まれ、キャリアとなります。